

エディトリアル ガイドライン (出版方針)

パウロ的使徒職のアイデンティティ・内容・対話相手

序文

「福音のためなら、私はどんなことでもします」(一コリント 9・23)。第10回修道会総会のモットーは、パウロ的使徒職活動を導く灯火のようである。この広大な視点にインスピレーションを受けて、総会に参加したメンバーは、わたしたちの召命の本質的な次の一面を強調した。「聖パウロ修道会会員は、個人的、共同体的、そして使徒的生活の中で、またさらにはコミュニケーション文化の中で、道、真理、いのちである師イエスを十全的に生き、宣べ伝えた福者ヤコブ・アルベリオーネの力強さに倣いながら、使徒パウロのように福音の宣教者であることが求められています」¹。このインスピレーションからくる駆り立てから、「みことばに奉仕する宣教への活力を〔創造的に〕新たに作る」² という指針が生まれた。そして、この広大な展望のうちに、今や2005年までさかのぼる文書「パウロ的使徒職の出版方針・内容・受け手」を更新し、この文書を管区・地区に固有の司牧的状况に適用する責任を管区・地区統治に委ねるといった要求も生まれた³。

この文書更新の歩みを進めるために、また、パウロ的使徒職と生活において問題となっている諸テーマに関するより深い考察を始めるために、総統治は、CTIAを通して2017年10月16日から21日まで第2回聖パウロ修道会出版・編集者セミナー(第2回SIEP)を招集した。世界中からおよそ60名のパウロ会員が参加し、コミュニケーションの新しいコンテキストやパラダイムについて共に考えると同時に、出版界における際立った変化、特にデジタル言語の出現によってもたらされた変化がもたらした影響について——これらの変化は、当然のごとく、パウロ的エディター(出版人)のプロフィールや優先事項の再定義をもたらす——意見や経験を分かち合うことができた。

1. パウロ的エディターのアイデンティティ

1.1 パウロ的エディターは、死んで復活されたキリストの体験を証しすることこそが真の使徒的靈性であることを、パウロから学ぶ。キリストこそ、福音宣教の中心的で唯一

1 第10回修道会総会決議文書 序言

2 第10回修道会総会決議文書優先課題 1.1

3 第10回修道会総会決議文書活動方針 1.1.2 参照

の内容であり、それは告知をとおして徐々に様々な形をとる。パウロ的エディターは、パウロから、世界の具体的な諸問題を捉える力（教会的、共同体的、社会的……レベルで）を得、あらゆる対話相手に言語表現を適応させるパウロの努力を学び取る。さらに、司牧性と普遍性の次元、預言、熱意と全面的働き、情熱と聞く力、大胆さと協力者のネットワークを築く能力、使徒的ダイナミズムと責任感を受け取る。パウロから、福音のためならどんなことでもすることを学ぶのである。

1.2 あらゆるパウロ会員は、その固有の召命によって「エディター」である。これこそが、その生活と活動、召命と使命の「唯一の目的」⁴ である、とアルベリオーネ神父なら言うだろう。パウロ会員とは、キリストに呼びかけられ、コミュニケーションの使徒となるため、本質的に「エディター」となるために聖別奉獻された者である。「エディター」、それは、ある一つの体験に形を与え、その個人的な、あるいは共同体的な信仰生活やキリストとの出会いの生活を、言葉、文、イメージ、音、映像、デジタル媒体、あるいは技術の進歩が徐々に生み出し、発展させていく、他のあらゆる形態を用いて書く、あるいはこれらの媒体に表現し直していく者である。しかし、またあらゆる言語媒体がコミュニケーションによって、またコミュニケーションにおいて福音のインカルチュレーションへの奉仕となるような体験や企画にも表現し直していく者である。マリアの模範にならって救い主を世界に与える（＝ラテン語の *edit*）者なのである⁵。

1.3 パウロ的エディターが有するアイデンティティと内容の豊かさにもかかわらず、ときどきこの宝物をよりはっきりと正確に、またより効果的で意味深い形で共有していくために最適な方法と形態が欠けている。時に、デジタル環境のような、新しい諸分野、諸文脈を身に負ったり、その中に身を投じたりする大胆さが不足しており、実際のニーズに常に適応させるために構造を見直す勇気が不足している。さらに、さまざまな現実において、まだまだ根本的でとても効果的である、いくつかの伝統的な出版形態——例えば、映画、ラジオ、あるいはテレビ——に新たな活力を与える能力が欠けている。

1.4 第1回聖パウロ修道会出版・編集者セミナー（第1回 SIEP）の時から、修道会は「一体的マルチメディア・エディター」という考え方に向かって実りある歩みを行ってきた。現在の挑戦は、今や、組織構成や表面的な提案、あるいは「製品」に関する提案だけに留まってしまわないように、創造性と新たな「資源」をもって、質的な飛躍を実現することである。「一体的マルチメディア・エディター」は、新しい関係性の

4 Renato Perino, *Atti del Seminario Internazionale degli Editori Paolini* (聖パウロ修道会出版・編集者セミナー記録文書) 1988年, p. 13 と p. 154 参照; 「聖パウロ修道会会憲」(1922年版) 2条; ヤコブ・アルベリオーネ, *UCBS*, 1923年 n. 2 (27 feb., p. 3), n. 4 (19 apr., p. 3), n. 6 (21 giu., p. 17).

5 *Vademecum*, n. 1051 参照

形やクロスメディアとトランスメディア・ナラティブの可能性を探りながら、使徒職の3つの段階、すなわち、編集—創作（内容）、製作—技術（形態、サポート）、宣伝—普及（戦略）において、デジタル改革を完全に自分のものとするという挑戦に向き合う。

1.5 この質的变化の出発点は、刷新された明確で具体的で戦略的な使徒職プロジェクトを持つことである。このプロジェクトが、さまざまなイニシアティブや使徒職分野間における、共通の判断基準や目標をもった力の結集と協働を助けるからである。これは、すべての人、共同体、活動、イニシアティブを——「パウロ的エディター」とは常に共同体的な主体であることを意識したうえで——唯一の線路上に統合することを意味する。それは、わたしたちのカリスマの遺産⁶ から浮かび上がることであり、わたしたちの会憲そのものが強調していることである。「聖パウロ修道会の目的は、特に共同使徒職を通じて遂行されるのであるから、全会員は兄弟としての協力と友情をつちかい、共通の召命にともに応えるために互いに助け合うように」⁷。個人のイニシアティブに関するプロジェクトはすべて、「中央集権と自治および利己主義（訳注：「自己満足および個人主義」と訳したほうがよい）を排除し」⁸、このエディトリアル・ガイドラインに調和するものであると同時に、管区・地区の一体的「使徒職プロジェクト」に組み込まれなければならない。

2. 変わるための勇気

2.1 アルベリオーネ神父が言っていたように、「修道会の主要な財産は、壁や畑（訳注：建物や土地のこと）ではない。出版である」⁹。第2回 SIEP で確認された事実のひとつは、わたしたちの使徒職の構造が今日の社会的—コミュニケーション的文脈の真のニーズに適していないということである。今日の世界における社会的骨組み、居住条件としてのコミュニケーションの進展に合わせた決定を行うことが、おそらく時として、わたしたちにはできなかった¹⁰。デジタル革命はあらゆる場に生じ、今の時代の人々のメンタリティとライフスタイル、そしてあらゆることのやり方自体を急速に変化させているのとは比べて、わたしたちは遅れている。

2.2 わたしたちが慣れ親しみ、またその上にわたしたちの使徒職面、養成面の枠組みすべての基礎を置き、築き上げてきた、コミュニケーションの産業的モデル¹¹ の危機を

6 ヤコブ・アルベリオーネ, *Abundantes divitiae gratiae suae*, n. 23 以下参照

7 会憲・指導書 15 条、また 77 条以下も参照

8 会憲・指導書 85 条

9 ヤコブ・アルベリオーネ, *Mihi Vivere Christus Est*, n.225

10 *Atti del 2º Seminario Internazionale degli Editori Paolini* (第2回聖パウロ修道会出版・編集者セミナー記録文書)、聖パウロ修道会総本部、ローマ、2018年、pp. 35 以下と pp. 191 以下参照

11 マスメディアと文化産業の典型的モデルであり、「マス（大衆）」市場のニーズにこたえるため、大規

前にしても、わたしたちにはまだ、他の選択肢を見つけるよう反応するうえで、明らかな難しさがある。「今日では、もう説教壇は十分ではない。あらゆる手段が必要だ。実際にわずか数年間で世界は変わったのであり、わたしたちが世界と歩むためには自分たちを少し刷新する必要がある。映画、ラジオ、出版、テレビ、そしてコミュニケーションのために役立つすべてのもの」¹² と、アルベリオーネ神父はすでに 1955 年に言っている。だからこそ、わたしたちは、技術や手段の革新に関してだけでなく、コミュニケーション・エコロジーと今日の出版業界とを決定づけるコミュニケーションの概念や新しい形態に関して、特に自己を刷新していくことが大切である¹³。

2.3 「私たちの使命は、コミュニケーション手段を用いることだけでなく、使徒パウロの精神をもって、すべての人に迅速、かつ効果的にイエス・キリストの福音を宣べ伝えること」¹⁴ の自覚のうちに、パウロ的エディターは大きな責任を有する。なぜなら、彼自身が福音宣教の道具となるように、また、あらゆる手段を用いて、あらゆる状況の中で、情熱、創造力、専門性、献身、一貫性をもって福音を伝えるように呼ばれているからである。

3. 関係を築くこと

3.1 パウロ的エディターは、コミュニケーション実践の場のキーポイントである「関係性」や、意味と内容の共同創造の場としてのネットワークに注意を払いつつ、新たな存在のあり方、活動のあり方を、手段に応じてではなく、むしろ文化や新しいコミュニケーションの「文法」に応じて、模索すべきである。パウロ的エディターは、神の民全体への奉仕、特に今日の「周辺地域」に住む男女への奉仕のためにあるからである。

3.2 「関係性」に照らされて、またエコロジカルな協働という視点からパウロ的出版を再考するには、当然のことながら、近づき、対話し、聞く能力を必要とする。第一に、対話とはただ単にデータや情報の交換なのではなく、他者との関係は単なる「つながっていること」に限定することのできるものではないことを理解することが大切である。

模生産の上に、また受け手への広がりという点で定型化や理知化を取り入れたシステムの上に基づくモデル。「産業的」と定義されるのは、このモデルが創造的で各人に合わせた生産よりも、むしろ産業に特徴的な組織形態に同化されたものであるため。

¹² *Prediche del Primo Maestro* (1952~1955年のもの)、R.F.Esposito, *La teologia della pubblicitaria*, EP Roma 1972, p. 19 から引用

¹³ 前掲書 *Atti del 2^o Seminario Internazionale degli Editori Paolini* (第2回聖パウロ修道会出版・編集者セミナー記録文書)、pp. 53 以下と pp. 163 以下参照

¹⁴ 第10回修道会総会「修道会総会宣言文：聖別奉獻されたもの、またコミュニケーションの使徒として現代社会において喜びをもって福音宣教する」(訳注：引用箇所イタリア語宣言文を直訳し直すと、「わたしたちの使命は、ある特定のコミュニケーション手段を用いることではなく、使徒パウロの精神をもって、すべての人に迅速、かつ効果的にイエス・キリストの福音を宣べ伝えるということ自体にほかならない」)

パウロ的エディターは、単なる接触を対話や交流のしるしと混同してはならず、単なるメッセージの交換を真のコミュニケーションと混同してはならない。コミュニケーションはもっと奥が深い訓練なのであり、快適さや自己依拠的姿勢というわたしたちの普段の場から、わたしたちを外に出して行かせるものである。

3.3 この歴史的転換の時にあって、より広い地平へと目を向けるために自己依拠的姿勢を乗り越えることは、必然的命題である。わたしたちの使命の対話相手を知り、彼らに近づくためには、パウロ的エディターは「外へ出て行く」歩みをしながら、姿勢やメンタリティを変えなければならない。これは、今日の教会の教導職が明らかに示していることであり、また、福音を伝えることによって人間関係と共同体を築いていった聖パウロの模範にも示されている。

3.4 一般に、わたしたちは受け手に「聞くこと」（「アゴラ（＝町の広場）」の論理）より、彼らに「話すこと」（「説教壇」の論理）に慣れている。このため、絆を作り、関係を育むことのできる場と手段を推進していくには、わたしたちが態度の回心に努めることが重要なのである。これこそ、わたしたちが質の高い内容と奉仕を提示するための出発点である。「聞く」ために優れた場はわたしたちの書店である。もちろん、書店が福音宣教と文化のための、真の、そして固有のマルチメディアセンターとなっているのであれば¹⁵、また福音の光を輝かせる源泉となっていれば、そして人間性、出会い、対話の場、奉仕の場、養成の場となっていれば、である。人々と出会い、交流するために大きな可能性を持つ他の場所——そして、同時に、福音宣教に新しい道を開き、コミュニティー¹⁶を作るために主役としての働きをする可能性を持った場所——は、わたしたちの文化センター、パウロ的コミュニケーション研究センター、神のみ言葉を広めるためのさまざまなイベント、パウロ会の各共同体である。これらはすべて、パウロ的出版

15 ヤコブ・アルベリオーネ『出版使徒職』n. 403 以降; ヤコブ・アルベリオーネ、*Considerate la vostra vocazione*, p. 133 (「書店は、あなたたちの光、愛、祈りのセンターです」); p. 214 (「書店は、修道会にとって、信徒とのコミュニケーションの拠点です。書店は神殿です。光と愛のセンターです。多くの徳を実践するための場です」); p. 261 (「わたしたちの書店は、使徒職のセンターです。それを示すものは、聖パウロの肖像とともに置かれた福音です。書店は、商店ではありません。信徒への奉仕です。売買ではありません。献金による使徒職です。顧客がいるわけではなく、協力者がいるのです。事業のためではありません。イエス・キリストにおける光と熱のセンターです。支配することを目指しません。教会と人々に奉仕することを目指します。お金を得るためではありません。人々をもうけるためです。カトリックの活動家や聖職者は、彼ら自身の役務のために協力、光、方向性を見いださなければなりません。値段ではありません。献金です。書店は、聖パウロ修道会全体を映し出します。書店は、修道会と人々の接点です。パウロ的使徒職のすべてのイニシアティブを広めるセンターです。神の出版社です。書店は神殿です。書店員は福音宣教者です。イエス・キリストとキリスト教的な生活における光、聖性、喜びが求めるべき実りです。レジ机は真理の説教壇です」)

16 著書『*Communities Manifesto*』(2010年)の中で、Stan Garfieldは「コミュニティー」の概念を次のように定義している。「[コミュニティーとは] 特定の案件をとおして、特徴、役割、情熱、興味、心配、あるいは一連の問題を共有する人々のグループのことである」

活動が持つ関係性および使命の次元を表現する今日の形なのである。しかし、それらは常に、すべての使徒職分野との調和と対話のうちに置かれなければならない。

4. すべての相手に開かれたものとして

4.1 第 10 回修道会総会では、すべての人に、特に最も助けを必要としている人々、さまざまな種類の周辺地域や前線地域に住んでいる人々開かれることの必要性を繰り返した。このことは、教皇フランシスコの教皇職において、特に使徒的勧告「福音の喜び」の中で明確に現れている。

4.2 パウロ的エディターの大きな挑戦は、それぞれの現実の中で、わたしたちが向かうべき「貧しい人」、「遠くにいる人」、「信じない人」とは誰なのかを特定することである。人間の歴史の他の時代と同じく、今日も人類と社会の不足や限界は多く、傷ついた人、答えを探し求めている人は多い。このことを意識しながら、パウロ的エディターがどのような貧しさに応えていくべきなのかを認めるという挑戦である。

4.3 電子機器の普及、アルゴリズム、コミュニケーションの騒音とデータや情報の「デジタル世界における嵐」は、わたしたちを真理に対して耳が聞こえない者としてしまいうる。増大し続ける情報スピードの速さとその分量の多さは、実際に、今日の社会の判断能力を弱体化させてしまう。この意味で、「すべての人に真理という愛を行う」というアルベリオネのモットーは実に現実的である。「onlife」¹⁷ の住民に対して、批判的で自立した精神を高めるための道具を提供することは、パウロ的出版活動が持つ預言的次元の一つだからである。こうして、彼らがより意識的かつ建設的な在り方を持てるように、また、彼らが混乱、暗闇、「フェイクニュース」の中にあって真理を見つけ出すことができるように助け、使徒的勧告『喜びに喜べ (*Gaudete et exultate*) ——現代世界における聖性』の中で示されているように、彼らがこのような環境の中で「聖性」を生きることができるように助けるのである。

4.4 重点的に考慮すべきカテゴリーのひとつは、いわゆる「ネイティブ・デジタル (生まれながらのデジタル世代)」と呼ばれる若者と子どもたちである。そのためには、彼らの「言語」を真剣に、また意味深い方法で身につけるよう努力することが土台である。それは、新しい世代が、救いをもたらす主との出会いを実現することができるように、そして意義と価値に満ち溢れた人生へと導くような、別の道を見いだすことができるよ

17 今日のハイパーコネクト・コミュニケーションの世界における新しい生活条件を定義する概念で、主に 4 つの大きな変化に特徴づけられる。実在 (オフライン) と仮想 (オンライン) の区別の不明瞭化。人間と機械と自然との間の区別の消滅。情報不足の状態から情報過多な状態への転換。「オーナーシップ」と「バイナリレーション (2 項関係)」という概念から「プロセス」と「ネットワーク」という概念への移行。

うに彼らを助けるためである。

5. 使徒的一致

5.1 特に、「交わり」として理解されるコミュニケーションにおいては、グループとしての、またネットワークの中での仕事が不可欠である。パウロ的エディターとは、孤立した人ではなく、一体的で結束した「体」に属する者である。ネット社会における新しいコミュニケーション・ダイナミズムは、連携され、調和のとれた、横のつながりのある、普遍的視野に立った仕事を要求する。チームとして、協働のうちになされるこの仕事¹⁸は、すべての管区・地区にあって、さまざまな使徒職分野とそれぞれの顧問会（訳注：日本管区の使徒職活動の規模は小さく、サンパウロが使徒職活動の組織体であるが、複数の組織体・法人などをとおして使徒職を展開している管区・地区では、それぞれの組織体・法人ごとに管区・地区統治とのパイプ役となる顧問会が置かれる）の間から始まる。これこそ、エディターであることの特徴である、一致と団体性のしるしである。

5.2 その初期養成から使徒職プロジェクトの実践に至るまで、パウロ的エディターを特徴づけるべき要素として、今日最も必要とされているものには、普遍性¹⁹、国際性、多文化性がある。国際的でネットを用いたプロジェクトやイニシアティブを発展させること、使徒職の組織構造を連携させ、再編し、最適化すること、大陸一言語グループを見直すこと。これらは、第2回 SIEP の参加者が全会一致で取り決めたことの一部であり、実現すべきことである。

5.3 一致、普遍性、信頼性のシンボルとしてのロゴマークに対する敬意と有効利用は、見落としてはならない重要な一歩である。統一された唯一のロゴマークは、わたしたちに共通のアイデンティティを与え、わたしたちの名前を認知させた。わたしたちの発行物が丹念に作られ、質の高いサービスとプロジェクトをわたしたちが提供すれば、最終的にそれらは非カトリック界でも評価されるであろう。わたしたちは、いわゆる「信じていない人々」との出会いを避けて、隠れてはならず、むしろ対話に開かれたエディターとして、すなわち福音に従った人間的価値をとおして、批判的センスと預言者的精神をもって社会と人間の発展に貢献することを望むエディターとして認められるように模索しなければならない。ロゴマークに新しい表現とコミュニケーション形態を与えつつ、ロゴマークの定着とさらなる認知のために働くことが本質的である。そのため、わたしたちのロゴマークがすでに表し、保証している、エディターとしての価値、アイデ

18 会憲・指導書 85 条およびそれ以下：「使徒職での協力」参照

19 ヤコブ アルベリオーネ、*Ut perfectus sit homo Dei*, I nn. 372 以下参照：パウロ的使命は、人においても、技術的手段においても、時代においても、内容においても普遍的である

ンティティ、信頼性を特に大切にすることはわたしたちの責務である。

5.4 使徒職でのこの一致は、一般の協働者たちとの関係においても表されるべきである。それは、彼らのプロフェッショナルとしての存在感を高め、パウロ的カリスマに属しているという意識を強めることによってなされる。こうして、彼らを、変容と新しい命を生み出すという、本修道会の宣教使命を真に共有する者とするのである。同じように、それはパウロ家族との統合においても検証されるべきである²⁰。わたしたちのメンタリティやメカニズムは、時として、真の、相互の協働という意識にではなく、競争意識に導かれており、パウロ家族はこのメンタリティやメカニズムを変えるように求めている。

6. 出版の選択

6.1 すべてのパウロ会員にとって、次のことが明白でなければならない。まず、「[わたしたちは] すべての人に福音をもたら[し]ます。福音とは概念や形式ではなく、世の救い主、ただ一人の教師（マタイ 23・10）、道、真理、いのち（ヨハネ 14・6）であるイエス・キリストご自身です」²¹。この中心的・本質的な内容から他の全ての内容が生じる。したがって、内容の優位性は、放棄できないことである。その帰結として、内容はパウロ的エディターにとっても優先事項でなければならない。経営や商業部門の中でパウロ会員の数を減らすことはできても、内容の吟味や、パウロ的アイデンティティに基づくエディトリアル・ガイドライン（出版方針）の実施は決して放棄することができないのである。

6.2 わたしたちの出版の選択は、さまざまな分野や地域において、わたしたちの聖別奉獻の預言者的な側面を表すべきである。それは、人々が現実を読み取ることができるように、また今日の挑戦に向き合うことができるように助けることによって、そして責任と意識のある選択をおこなうための判断基準を彼らに提示することによってなされる。それらは、「外へ出て行くエディター」となることを要求する。社会的感受性、革新的な提案、方法をもって、「福音宣教、人間の向上、発展と解放」²² の間にある深い絆を意識した、「外へ出て行くエディター」である。

6.3 第 2 回 SIEP のグループワークを踏まえると、わたしたちの使徒職の使命に特徴的

20 会憲・指導書86条参照（「聖パウロ修道会とパウロ家族の他の諸会との関係は、……霊的、知的、使徒職上の面で緊密に協力する特徴を帯びるように」）、また86条1項参照（「特別に聖パウロ女子修道会との使徒職の諸関係においては創立者のカリスマに従って、わたしたちは、聖パウロ女子修道会と共通した一つの宣教使命を持っていることを心に留め、この宣教使命が教会の前で一つであることを見せるべきことも心に留めよう。この原則はわたしたちの使徒職活動全体の内容の中にも、プログラムの中にも実際の順位を選ぶ場合にも、絶えず本会の使徒職活動全体に靈感を与えるであろう」）

21 第 10 回修道会総会「修道会総会宣言文」

22 教皇パウロ 6 世、使徒的勧告「福音宣教」31 参照

で決定的な3つの分野²³の重要性と今日性を確認できる。3つの分野とは、聖書、家族、コミュニケーションである。

6.3.1 常に変化し続ける世界、より光を必要としている世界にあって、「聖書」は根本的に優先されるべきである。アルベリオ・ネ神父が言ったように、「聖書は出版使徒職にとって命である」²⁴、また、「主がわたしたちに与えてくださったあらゆる手段を用いて、人々に与えなければならない本である」²⁵。聖パウロ聖書センター（CBSP）の設立と発展、また「聖パウロ修道会聖書プロジェクト」のその5つの次元（出版、養成、司牧、霊性、教会）における適用は、あらゆる管区・地区においてパウロ的出版のこの点をテーマとする分野を強化するうえで、確かに重要となるであろう。CBSPの導きのもとで、すべての新しい取り組みや修道会の中ですでに長い伝統を持つ取り組み——例えば、講座、フェスティバル、クイズ大会、み言葉週間、SOBICAINが企画・推進した取り組みなど——も、生かされ、連携されるべきである。

6.3.2 「家族」は、現在の中核として、また社会の未来として、絶えず推進されるべきである。今日の世界には、家族を脅かす実に多くの問題と挑戦がある。したがって、この神の賜物であり、社会の根本的な中核である家族を、教会の教導職、特に使徒的勧告「愛のよろこび」と一致しながら、提言、方向づけ、支援を通して、活気づけ、保護し、推進していくことがますます緊急になっている。それと同時に、回勅「ラウダート・シ」が実践するよう、わたしたちを招いているとおおり、「ともに暮らす家」を大切にし、社会的感受性とエコロジカルな視点からの住民権を推進することも忘れてはならない。この分野においても既存の諸活動が生かされるべきである。わたしたちの定期刊行物、書籍、その他のプロジェクトや活動の中で、人間的あるいはキリスト教的諸価値へと教育することに向けられたもの、家族が日々の生活の中で神の愛を体験するように導くものに、特別な注意を向けるように。

6.3.3 第三の分野は、「コミュニケーション」である。コミュニケーションは環境と文化であるということ、すなわち、今日わたしたちが住んでいる場と時であるということ、また、すべての人とすべてのものがネット上で継続的につながっているということ意識すると、「コミュニケーションの分野における先駆者（訳注：「養成者」という訳のほうがよい）となることができるように、使徒的熱意をいっそう強める」²⁶ ことは根本的である。コミュニケーションは、出版における製作過程において特別な注意を向けられな

23 「パウロの使徒職の出版方針・内容・受け手」2005年、n.4 参照

24 ヤコブ・アルベリオ・ネ、*Per un rinnovamento spiritual*, Roma, 1950², p.102

25 ヤコブ・アルベリオ・ネ、*Vademecum*, n. 1014.

26 第10回修道会総会決議文書優先課題 1.2

けれどもならないが、特に、本会が促進するさまざまな活動や、わたしたちの養成の拠点（学習センター、カルチャーセンター、書店、共同体、小教区など）においてもそうしなければならない。こうして、コミュニケーションがあらゆる内容や活動を読み取り、解釈する基準となるのである。「福音宣教の目的で社会的コミュニケーションの機関を使用するばかりでなく、さらに、社会的コミュニケーションの機関の利用者を教育しなければならない。それは、かれらの教養、健全な気晴らし、霊性の向上のためにそれらのものを使用させるためである」²⁷。このパウロ的エディターに特徴的な側面は、特にデジタルの「アゴラ（＝広場）」において、非常に今日的であり、必要なことであり、緊急を要することである。「コミュニケーションの国際的な観測所」を作るという挑戦は依然として有効である。これは、特にすでに聖パウロ修道会に存在するコミュニケーションの学習センターを巻き込みながら、内容、情報、考えを生み出し、それらを共有し、修道会全体と教会への奉仕のため、真の、そして固有の革新的「実験室」として機能するものである。

6.3.4 この3つの主要なテーマの分野に、毎年、特定のひとつのテーマが加えられる。これは、今日のより重要な諸問題からアイデアを得たもの、普遍教会の歩みに一致したものとなる。このテーマは、総長から前もってふさわしい時期に示され、国内および国際レベルでのイニシアティブやプロジェクトを方向づけるものとされねばならない。

6.4 質の高さと信頼性は、パウロ的出版活動の継続的特徴でなければならない。それは、優れた提案、イニシアティブ、サービスを提供するうえで、一貫性と継続性の象徴であるからだ。財務指標は重要であるが、しかしながら経済的基準が内容やプロジェクトの選択において主要なものになってはならない。

7. 使命のための養成

7.1 パウロ会員にとって、コミュニケーションにおける生態系（エコシステム）は、専門分野に限定されてしまうものではなく、真の召命の場、使命の場であり、つまりそれは、わたしたちの生活環境と福音の告知の場ということである。それは、わたしたちの「証人としての実存的な形」²⁸なのである。この呼びかけに応えることができるように、パウロ的エディターは信仰の人、福音に情熱を持つ人、「キリストとともに、教会とともに、そして聖パウロとともに感じる」²⁹ ことができる人でなければならない。

27 会憲・指導書 74 条

28 教皇フランシスコ、使徒的勧告「喜びに喜べ」11 参照

29 ヤコブ・アルベリオーネ『出版使徒職』nn. 33-37 参照

彼は、預言者的な大胆さに満ち溢れた人で、この大胆さは、その人全体、すなわち知性、意志、心³⁰の漸進的な養成を通してなされる、「キリスト化」のプロセスから生まれる。

7.2 このような視点から、養成は、使徒—コミュニケーターであるパウロ会員にとって本質的な要素であり、それは、わたしたちとともに働く信徒の協働者にとっても同じである。パウロ会員の新しい世代は、単に教会法上、必要とされる学歴をこなす養成や、諸手段を機械的に、道具として用いるための養成を受けるだけでなく、コミュニケーションと出会いの文化の中で、そしてそれらの文化へと——勇気、創造力、そして希望をもって——養成されなければならない³¹。それと同時に、すべての誓願者とすべての共同体にふさわしい導き—同伴が、「メデュケーション」³²の分野で与えられなければならない。それは、新たなコミュニケーションの環境に分け入っていくという、必要な刷新を容易にするためである。十全的で、堅固で、固有の養成——それは、明確で、刷新された「*Iter formationis* (養成プロジェクト)」の実りである——を通してのみ、パウロ会員は真の「エディター」、「聖書とコミュニケーションの分野における先駆者 (訳注: 「養成者」という訳のほうがよい)」³³、考え、出会い、革新、批判的思考の推進者となることができるのだ。

7.3 今日の社会的—コミュニケーション的文脈の中で「宣教への活力を新たにする」³⁴ためには、挑戦や困難がたくさんある。自分たちが力不足で限界を持った者であることを認めながらも、しかしながら、わたしたちは、パウロ会員が使徒パウロの宣教のダイナミズムとアルベリオーネ神父の使徒的情熱に従って、師であるイエスの使命の継承者であるという確信に駆り立てられ、活気づけられるのである。「義務を怠らないようにしましょう。たやすく言い訳をしないようにしましょう。他の善を行っていると主張して、勘違いしないようにしましょう。わたしたちがやるべきことを行いましょう。時間を無駄にしないようにしましょう」³⁵とプリモマエストロは勧めた。わたしたちは、すべての人に真理 (であるイエス) が達することができるために、「使徒—コミュニケ

30 ヤコブ・アルベリオーネ『出版使徒職』nn. 64-71 参照

31 Valdir José De Castro, *Apostoli comunicatori per una cultura dell'incontro. Lettera annuale (2018)*.

32 例えば、F. Ceretti と M. Padula が『*Umanità mediale*』(Edizioni ETS, 2016) で述べているように、いく人かの著者は今日、「メデュケーション」という言葉を用いる。これは、「メディアとはわたしたちである」という仮定のもとでメディア教育をすることを意味する。メディア教育のこの新しい視点では、実際に教育されねばならないのは、メディア的な存在としての人類である。これは、「メディア的存在」としての人間の成長のうち人間を見つめることを意味する。これまで、メディア自体を教育の道具、対象、環境としてのみ見つめてきた視点 (これが、いわゆる「メディア・エデュケーション」の典型的視点) を超え、メディアとともに、メディアに対して、メディアにおいて教育し、教育されるという視点を意味する。

33 第10回修道会総会決議文書優先課題 1.2

34 第10回修道会総会決議文書優先課題 1.1

35 ヤコブ・アルベリオーネ、*Mihi Vivere Christus Est*、前掲書 n. 84.

ーター—エディター」として、あらゆる手段と言語を使って、今日、福音宣教をするように呼ばれている。「著者であり、エディターである神に従うなら、わたしたちの使徒職は本当に実り豊かなものとなり、決して終わることなく、召命は増し加わるだろう」³⁶。

2018年6月5日
総統治より承認

36 ヤコブ・アルペリオネ、*Per un rinnovamento spirituale*、前掲書 p. 102.